

はじめに

日本人を中心とした調査団（団長：置田雅昭・天理大学文学部教授）が、イスラエル、下ガリラヤ地方に所在するテル・レヘシュ遺跡で発掘調査を開始したのは2006年3月16日のことでした。さまざまな事前の経緯を経て、春の草花に覆われたテルに発掘が入った光景を目にしたときの感慨は今なお忘れることができません。第1次調査のあと、夏に予定していた発掘調査がレバノン戦争の勃発によって中止に追い込まれてしまったのも生々しい記憶です。明くる2007年春の第2次調査では慶応大学や同志社大学からも調査団スタッフやボランティアの参加があり、第3次調査からは団長が月本昭男・立教大学文学部教授に交代し、スタッフやボランティアの人数が拡大すると同時に、調査の範囲や規模もどんどん大きくなってきました。2010年8月の第6次発掘調査をもって、テル・レヘシュ遺跡の第1期発掘プロジェクトは一区切りとなり、現在は、報告書の作成に向けて、調査成果のとりまとめ作業を行っているところです。

遺跡の発掘調査というものは、多数の人間が参加して、協力しなければ成し遂げることができません。テル・レヘシュ遺跡の発掘調査プロジェクトの大事なところは、調査の成果もさることながら、プロジェクト自体が国際的なプロジェクトとして成長し、イスラエル内外から注目を集めるようになったことです。調査団のスタッフは、天理大学、立教大学など日本の複数の大学からの研究者で構成されていますが、その専門分野は考古学・歴史学・聖書学というように幅広く、ボランティアの学生・社会人も、日本、韓国、ドイツ、イスラエルなど多くの国から集まっています。また現場作業に来てくれるのは近くのアラブの村の若者たちで、彼らとも楽しく交流を行っています。調査団の宿舎であるキブツでの暮らしもまたボランティアの学生たちにとって非常に新鮮な体験です。飛び交う言語も数多く、遠い希望ではありますが、このプロジェクトが現地の平和に対するささやかな貢献になればと願っているところです。

5年にわたって行われたテル・レヘシュの発掘調査では、さまざまな困難や苦労もありました。しかし、それらを乗り越えつつ、大きな成果が導かれたときの喜びもまたひとしおでした。本冊子では、その成果の一端をご紹介しますと思います。

天理大学教授 桑原久男

凡例

1. 本冊子は、日本私立学校振興・共済事業団による学術研究振興資金「古代オリエントにおける都市と宗教の研究」（平成20年度～平成22年度、研究代表者：天理大学文学部教授桑原久男）による研究成果の一部である。
2. 本冊子の執筆は、桑原久男（天理大学）、山内紀嗣・日野宏・巽善信・飯降美子（以上、天理参考館学芸員）、月本昭男（立教大学文学部教授）、長谷川修一（立教大学非常勤講師）、小野塚拓造（筑波大学大学院博士後期課程）が分担して行った。文責は文章末尾に記している。
3. 本冊子の編集は、原稿執筆者の助力を得ながら、桑原が担当した。